

# 「おっさんずラブ」ファンダムをめぐる覚え書き

森本智子

(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科非常勤講師)

## ○前提のような

「おっさんずラブ」<sup>1</sup>が地上波テレビドラマとして放送された2018年からこの四月で丸4年が経過する。この間、BL(ボーイズラブ)作品を原作とするドラマ、LGBTQを扱ったドラマが矢継ぎ早に製作され、人気作も次々登場したことは周知のとおりである。昨年(2021年)の冬ドラマでは「美しい彼」(毎日放送、原作小説・風良ゆう)と「消えた初恋」(テレビ朝日系、原作マンガ・ひねくれ渡&アルコ)の二作が放送され話題を呼び、「昨日、何食べた?」(テレビ東京系、2019年、原作マンガ・よしながふみ)や「30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい」(同、2020年、原作マンガ・豊田悠)などの人気を得た作品が映画化されたことも記憶に新しい。もはや「おっさんずラブ」連続ドラマ放送時の“地上波でBL漫画テイストのドラマが放送されるとは!”といった新鮮な驚きからは隔世の感すらある。しかし、今なお「おっさんずラブ」を、過去の人気作として捨て置けない理由が、私にはあるのである。

すでに二度にわたり本誌で「おっさんずラブ」に関する論を発表してきた<sup>2</sup>ので論じ尽くした感もあるのだが、まだこのコンテンツで取り上げねばならないテーマがある。それはこのドラマを支え、今も推している人々(ファンダム)に関する考察、要するにコンテンツ受容の問題である。

とはいえ、実のところファンに関するテーマを扱うには私の側に少し、いやかなり問題があり、書きかけては挫折を繰り返している。おそらくは、事態を分析するには私自身が、あまりにも深くこのドラマのファン境界に入り込んでしまったがために、客観化が困難になっているのだ。メロドラマを研究しようとして自らがメロドラマを生きてしまう、そんな皮肉な事態となったことを自省しつつ、このコラムでは「論」の種となる“覚え書き”として、テレビドラマ「おっさんずラブ」受容をめぐる話題をつらつら並べてみたいと思う。

## ○「推し」と生活

あたしには、みんなが難なくこなせる何気ない生活もままならなくて、その皺寄せにぐちゃぐちゃ苦しんでばかりいる。だけど推しを推すことがあたしの生活の中心で絶対で、それだけは何をおいても明確だった。中心っていうか、背骨かな。

2021年、最も売れた小説『推し、燃ゆ。』<sup>3</sup>の一節である。〈上野真幸〉というアイドルを推すことに生きる力の全てを注ぐ「あたし」は、勉強や部活やバイト、クラスメートとの付き合いといった「余計なものが削ぎ落とされて、背骨だけになってく」自身を自覚している。しかし、SNSで「推し」への愛を語る日々は、「炎上」を契機に上野真幸が芸能界引退を決めたため、断絶を余儀なくされてしまう。取り替えの効かない「背骨」を失った「あたし」はどうなってしまふのか……。――

<sup>1</sup> 2018年4～6月「土曜ナイトドラマ枠」(23:15～00:05、テレビ朝日系)で放送(全7話)された、男性同士のラブストーリー(純愛)を描いた連続ドラマ(2016年の年末に同タイトルで放送された単発ドラマが元になっている)。タイトルが流行語大賞にノミネートされるなど社会現象を巻き起こした。翌2019年8月に続編となる映画「劇場版おっさんずラブ～LOVE or DEAD～」(東宝系)が公開、同年11月に設定を変更した続編ドラマ「おっさんずラブ—in the sky-」(全8話)が放送。なお、2021年には香港版リメイク「大叔的愛」も製作された。

<sup>2</sup> 「「おっさんずラブ」にみるテレビドラマの現在形」(『女子学研究 Vol.9』2019)と「「おっさんずラブ」の変容—そのコンテンツ展開の功罪—」(『女子学研究 Vol.10』2020)。

<sup>3</sup> 宇佐見りん『推し、燃ゆ』(文藝春秋、2020)は第164回芥川賞受賞作。2021年間販売部数は466,897部(オリコン調べ)で、小説ランキング1位、書籍ランキング5位。現役女子大生作家としても注目された。

「あたし」が直面する問題は、三次元のアイドルや俳優、ミュージシャンを「推す」場合、少なからず起こりうる事態である。恋愛スキャンダル、結婚、引退（脱退、解散なども含む）等々、生身の彼らに起きるリアルな出来事はそのままファンに降りかかる。アニメやマンガのキャラクターと異なり、実在の「推し」は年齢を重ねていく。彼らの人生とファンの人生が交わることはない……。それはさておき、ここで注目すべきは、「背骨」のメタファーに込められた、ファンの人生における「推し」の比重の高さ、その切実さであろう。

「推し」との距離感是人それぞれである。「推し」を持つ人すべてが「あたし」のように、全身全霊を捧げる、いわば自己犠牲的な感情を抱いているわけではない。「円盤」やグッズに課金する方法もあれば、日々の生活の潤い・癒やしとして愛でる人もいる。ここで取り上げる「おっさんずラブ」ファンの場合も、推す対象は、コンテンツそのもの、個々のキャラクター、役者のファン等々、それぞれ異なり、対象との距離感もさまざまである。しかしながら、本放送から四年の月日が流れてもなお、「おっさんずラブ」を愛し続けるファンの場合、作品を推すことそのものがもはや自身の一部、それこそまさに、『推し、燃ゆ』の主人公のように、「おっさんずラブ」を推すことが「背骨」と化しているのである。毎週土曜深夜、Twitter上に「おっさんずラブ 第〇〇〇話」というツイートが流れ出すのは、その一つのあらわれである。このツイートにより、2018年の連続ドラマが今週も更新、という架空の設定を共有する仲間が確認され、続編への望みが託されているのである。

実感を込めて言えるのは、最終回のハッピーエンドのままコンテンツを終えていれば、執着と言えるほどファンが思い入れる事態は起こりえなかったということである。おそらく時々そっと思い返し、ほのかに続編への望みを繋ぐような、ファンそれぞれの心に残るドラマとなっていたであろう。この事態は、「おっさんずラブ」という作品の特異さがもたらしたものである。すべては、恋愛ドラマにも関わらず、その「続編」を、主人公カップルの片われを変更する「パラレルワールド」に設定した「公式」の発表に端を発している（ファンの間ではこの発表を「0L 事変」「927 事変」と呼ぶ。）。以降、ファンはこの「続編」への支持／不支持を問われることとなり、その結果、かつて「優しい世界」と称されていたファンの間に深刻な亀裂・分断が走る事態が発生した（正直、あまりのどろどろ工合に当時を思い出すのも苦痛である）。その過程で多くのファンが失望を抱え、別のジャンルへと移動していったわけだが、その試練を乗り越えた現存するファンの2018年版「おっさんずラブ」への愛は「背骨」の比喻に匹敵するほど、それはもう重く深いのである。この詳細は、「「おっさんずラブ」の変容」という論文（注2）で述べたのでそちらを参照いただくとして、ここで「推し」と「応援」の違いについて押さえておきたい。

推す行為には「応援」の要素が入り交じるけれど、実は「応援」と「推し」とは似て非なるものである。二者の差異について、フリーライター横川良明の定義を引用しておこう<sup>4</sup>。

「応援」とは読んで字のごとく「援ける者」と「応える者」、この二者によって成立しています。一方、「推す」とはつまり「推薦する」こと。この「推し」という言葉は、ファンと芸能人の二者にとどまらず「推薦される」第三者の存在が含まれています。単に対象に声援を送っているだけなら「応援する」で事足りる。第三者に推しの良さを語り、あわよくば好きになってもらいたい。この布教精神が、自己完結型の「応援」とは異なる熱狂を生んでいるのです。

そして、横川は「推し」文化が広がるためにはSNSによる「シェアする／されるという行為」が不可欠だと語る。SNSことにTwitter文化を語る際、必ず引き合いに出されるのは「共感」というつながりのありかたである。横川はかつて2018年版「おっさんずラブ」ファンの言説をリードしていた人物であり、本書でもその点に少し触れているが、今は別のジャンルに移行している（続編「おっさんずラブ-in the sky-」への言及はなし）。

---

<sup>4</sup> 横川良明『人類にとって「推し」とは何なのか、イケメン俳優オタクの僕が本気出して考えてみた。』（2021、サンマーク出版）

とはいえ、本書でも数回「おっさんずラブ」（過去にハマったジャンルとして）への言及がある。特に最終回をめぐる章には、はっとさせられた箇所があった。曰く「不思議なことに、本当に優れたドラマというのは、喪失感だけでなく、むしろこの先もずっとこの世界のどこかで彼らが生き続けているような気持ちを味わわせてくれます。」。18年版「おっさんずラブ」の最終回はまさにそうした余韻を与えてくれるものだった。私が今も18年版とは異なる世界とされる「in the sky」を苦々しく思うのは、18年版では主人公春田（田中圭）に失恋した黒澤武蔵（吉田鋼太郎）が、こちらではその春田と結ばれるに至り、18年版までもがマルチエンディングの一形態であることを示してしまった点にある。「今も彼らがどこかで生き続けている」という想像の素地となるリアリティとマルチエンディングは相容れない。エンドロール後の世界を想像する余地を奪う「続編」は、少なくともドラマを支えてきたファンのために製作されたものではないだろう。ふと「貢いだ金がインザスカイ」という皮肉めいたツイートが思い出されたところで落ち着きを取り戻し、改めて18年版「おっさんずラブ」のファン層について少し触れておきたい。

## ○ファン層とジェンダーロール

『日経エンタテインメント』（2019年9月号）の記事「LGBTQ作品の「今」」によれば、「おっさんずラブ」の支持層は女性比率が53%、年齢層では20～49歳が過半数を占めているという。更に細かく見ると35～49歳がトップであり、記事ではこれは「BLの支持層に近い視聴者が反応したと推測できる」という。性別・年代に関しては、私や知人のTwitterのフォロワー（18年版「おっさんずラブ」を推し続ける人たち）から推測してもうなずけるところである。しかし彼女たちが「BLの支持層」かと言うとどうも異なる気がしてならない。

ファンが醸し出す雰囲気としてどこかしら通じるものを感じるのは、2004年に大ブームを巻き起こした韓国ドラマ「冬のソナタ」のファン層である。二作品に共通するテーマは〈純愛〉である。とはいえ、「冬ソナ」は14年前の作品であるからファンの内実は重ならないわけだが、『「冬ソナ」にハマった私たち』（林香里、文春新書、2005）の、「冬ソナ」を支えた50代前後の女性たちの多くは「専業主婦」であり、彼女らの生き方の正当性を下支えしたのが「ロマンチック・ラブ」（「愛」と「性」と「結婚」の三位一体をもって女性のしあわせとする強固なるイデオロギー）である、という記述は何らかのヒントをくれそうである。

ところで、この間、大学院時代の先輩（テレビ放映された劇場版から「おっさんずラブ」にハマるという経歴の人）と話していた際、それまでBLに食指が動かなかった彼女が、「おっさんずラブ」を契機に二次創作にまで手を伸ばしていることを知ったのだが、主として「pixiv」を対象とする分析にも驚かされた。

彼女曰く。「おっさんずラブ」の二次創作には、家事、ことに料理の場面が占める割合が非常に高い。ドラマの中でも料理をする、食卓を囲むといった場面が印象的に描かれていたが、たとえば食事を用意した牧（林遣都）に向け、春田が「おいしい」という発言を連発するなど、家事への感謝を素直に表す姿が、視聴する主婦層に、伴侶の理想の反応しとして響いたのではないだろうか。二次創作において、食材選びや調理過程が丹念に描写され、食事シーンが頻出するのは、書き手である主婦層の体験と願望が投影されると考えられる。

——なるほど、とうなずける、実証するのは難しそうであれ、思い当たるどころの多い指摘だった。ここで押さえておかねばならないのは、そもそも「おっさんずラブ」作品内で同性カップルの役割分担が明示されていない点である。二次創作においては、〈受け〉（女性の役割）であるのか、〈攻め〉（男性の役割）であるのか、書き手の好みも反映されるが、「牧」の場合、彼がどちらの役割の場合に振り分けられても料理場面が設けられているのが興味深い。そもそも牧は本社から来たエリート社員の設定であるので「専業主婦」とは異なるのだが、彼を「受け」と捉えれば主婦が共感できるキャラクターとなり、「攻め」と捉えれば仕事帰りに家事も担う理想の夫となるわけである。

## ○「多様性」というマジックワード

二次創作での描かれ方から離れ、ある種の社会現象ともなった「おっさんずラブ」受容について、違う角度か

ら考えてみたい。朝井リョウの小説『正欲』（2021、新潮社）に、明らかに「おっさんずラブ」を想起させるドラマが重要な位置づけで登場することをフォロワーの方から教えられ、早速読んでみた。「おじさんだっけ恋したい」（通称おじ恋）という架空のヒットドラマがそれであり、プロデューサーが若い女性で、ドラマの制作エピソードをあちこちのメディアで語るところまで「おっさんずラブ」のそれを模している。たとえば女性プロデューサーのインタビューはこんな感じだ。

【折角テレビっていう、多くの人に同時に無料で訴えかけられるメディアで働いているからには、社会に良い影響を与えられるものをこれからも作っていきたいです。『おじ恋』には、LGBTQ 当事者の方からもそうでない方からも、このドラマのおかげで生きやすくなったとか、多様性という言葉について考えるようになったとか、そういう、これまでの担当作では聞けなかったような感想が多く届くんです。これからも、観ている人が誰も仲間外れにならないような、もっと自分に正直に生きてもいいんだと思えるようなドラマを作っていきたいです】

……書き方がなんとも悪意に満ちている。というのも、ここでふわふわと語られる「多様性」や「仲間外れにしない」といった認識に牙をむくような文言がすでに序章で述べられているからである。「おっさんずラブ」を評する際に用いられた「フラットな恋愛観」や「みんなに優しい世界」という言葉、そしてそこに通底する「多様性」という概念を揺るがしかねない、その言葉を引用しておこう。

多様性、という言葉が生んだものの一つに、おめでたさ、があると感じています。

自分と違う存在を認めよう。他人と違う自分でも胸を張ろう。自分らしさに対して堂々としていよう。生まれ持ったものでジャッジされるなんておかしい。

清々しいほどおめでたさでキラキラしている言葉です。これは結局、マイノリティの中のマジョリティにしか当てはまらない言葉であり、話者が想像しうる、“自分とは違う”にしか向けられていない言葉です。

想像を絶するほど理解しがたい、直視できないほど嫌悪感を抱き距離を置きたいと感じるものには、しっかり蓋をする。そんな人たちがよく使う言葉たちです。

「多様性」とともに、BL 的な映像作品を評する際に頻出するキーワードに「普遍の愛」という言葉がある。そこから思い出されるのは、早稲田大学演劇博物館で開催された「INSIDE/OUT 映像文化と LGBTQ+」展（会期：2020 年 9 月 28 日～2021 年 1 月 15 日）において、「おっさんずラブ」がまともに取り扱われなかった事実である。その図録の第 5 章「ゼロ年代以降の国内メディアと LGBTQ+」では映画はもちろん、「弟の夫」や「きのう何食べた？」などドラマの場面写真が並ぶ。しかし、「おっさんずラブ」はかろうじて年表に記されているものの、同時期のほとんどの作品が挙げられる中、写真のみならず文章での言及も皆無である。ここには、この展覧会を企画した久保豊（映像研究、クィア映画批評家）の見解が明確に現れている。久保は、2018 年版の「おっさんずラブ」には好意的なツイートを寄せていたが、劇場版に至り「同性愛的な関係性を搾取することによって 26 億以上の興行成績をはじき出した」（『日本映画における男性同性愛表象の過去・現在・未来』『キネマ旬報』2019.8 月号）という辛辣な評価に転じている。今回の展覧会において「おっさんずラブ」への言及が避けられたのは、劇場版（及び年表への記載すら無い「続編」）における LGBTQ の扱い方が「反 LGBTQ」であると判断されたためだと考えられる。

いずれにせよ、思考停止を促しかねない「多様性」という言葉、そこから派生する「普遍の愛」といった美しい響きを持つ言葉に惑わされず、作品の内実に目を向けていく必要があるだろう。そこに「推し」の問題（受け手の問題）を絡めつつ、「ファン論」への道を探っていききたい。

## 【参考文献】

- 『ユリイカ 特集：女オタクの現在—推しとわたし』（2020年9月号、青土社）  
河野真理恵「映像メディアにおける同性愛表象の現在」（『現代思想 特集：〈恋愛〉の現在』、2021年9号、青土社）  
『Inside／Out—映像文化とLGBTQ+』展図録（2020、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）

-----

## 編集後記

「女子学研究12」をお届けします。ひさびさに50ページを超えるボリュームとなりましたので、たっぷりお楽しみいただければと存じます。

永らく中断していた例会の方も2022年2月26日に、2年ぶりにZoomと対面による研究会を開催し、米澤泉・馬場伸彦先生の共著『奥行なくした顔の時代』（晃洋書房2021年9月）をめぐるシンポジウムを行いました。対面・オンラインのハイブリッド開催でしたが、機材トラブルも多少あったものの、コロナ禍中のタイムリーなテーマであったためもあって盛り上がった研究会になったように思います。しばらくはこの形での開催が続くことと思われます。

2017年春から女子学研究会の研究代表をしてきましたが、リフレッシュを図るためにも、2022年度からは馬場伸彦先生にバトンタッチしたいと思います。これからますます活発に、そしてますますオシャレになっていくことと思いますが、どうぞご期待ください！

### 女子学研究 vol. 12

発行日 2022年5月15日  
編集・発行 女子学研究会  
連絡先 658-0001  
神戸市東灘区森北町6丁目2番23号  
甲南女子大学  
研究代表者 信時哲郎  
Tel & fax 078-413-3065  
<http://joshigaku.net/>  
e-mail : [nobutoki@konan-wu.ac.jp](mailto:nobutoki@konan-wu.ac.jp)  
印刷 ちょ古つ都製本工房（京都）